

図書 紹介

ピロリ菌 - 日本人 6 千万人の体に棲む胃癌の元凶

伊藤慎好著 (四谷メディカルキューブ内視鏡センター)

発売元：祥伝社 / 〒101-8701 東京都千代田区神田神保町3-6-5 / 03-3265-2081 /

A 6 判 / 212頁 / 価格 740円 (税別) / 2006年 3 月 5 日発行

だれも胃の中に細菌がいることを信じていなかった。この細菌であるピロリ菌の発見と
に対して2005年のノーベル医学生理学賞がオーストラリアのウォーレンとマーシャルに与
えられた。ピロリ菌の発見とその後の研究は、細菌学のみならず、胃炎・十二指腸潰瘍、
胃癌についての教科書を書き換えることになるほど重要で、画期的なことであった。しか
し、胃癌の発症に関する因子は数多くあり、例えば食習慣による塩分摂取量と関連性も否
定できないなど、胃癌に至るにはピロリ菌の感染状態、その菌の種類。感染者の遺伝的な
要素、食生活など多くの要因が複合しているおり、またまだ研究課題が残っているという。
一方、「ピロリ菌に感染したことのない人は胃癌をほとんど発症しない」という報告が出
され、ピロリ菌の感染はほとんど胃癌の「前提条件に近い」存在となってきた。日本は先
進諸国の中で驚異的に高く、中高年層では約70～80% が感染者で、日本全体で約6千万人
がピロリ菌に感染していると推定されている。ピロリ菌感染の診断と治療の方法や、どう
いう人に胃癌のリスクが高いかなどが相当程度判明できるようになってきたという。

ピロリ菌は正式名をヘリコバクター・ピロリ(*Helicobacter pylori*) といい、ヘリコバ
クター属の細菌の一つである。ヘリコバクターとはらせん状の細菌で、ピロリとは胃の出
口付近の幽門部のことをいう。現在では細菌学のみならず、生化学、分子生物学、腫瘍学、
疫学、消化器病学、臨床検査学などの医学の各領域で注目されている。本書のその内容は
ピロリ菌とその感染状況から胃と食事・生活習慣までの5章からなり、また、随所にコラ
ムを設けて難解な用語について説明を加えて理解を深める工夫もなされている。

第1章 ピロリ菌とその感染状況

第2章 胃癌はピロリ菌が原因だった

第3章 ピロリ菌が関連する疾患

第4章 検査法と防除法

第5章 胃と食事・生活習慣

次に主なサブタイトリを記すと、第1章ではピロリ菌とは、ピロリ菌「発見」までの歴

史、ピロリ菌の特徴と胃粘膜への傷害作用、ピロリ菌の感染状況、第2章では、日本では毎年約5万人が胃癌でなくなっている、普通の健康診断や検診では安心できない、胃癌とピロリ菌の関係、胃癌のリスクを見極める方法、胃癌のリスクを下げる方策が述べられている。第3章では、胃潰瘍・十二指腸潰瘍、胃癌の診断と治療、胃ALTリンパ腫、除菌治療が望ましいその他の病気、ピロリ菌感染と関連の可能性がある病気、第4章では、あなたはピロリ菌に感染していませんか、胃内視鏡検査と胃レントゲン検査、健康保健が使える場合と使えない場合、各種のピロリ菌検査法、除菌の方法と有効性・成功率・安全性、初回除菌に失敗したときの治療、除菌治療後の注意、ヘリコバクター・ピロリ感染の診断・治療のガイドラインと具体的な対応におよんでいる。最後の第5章では、胃の病気と食事の関係、食品で癌の予防効果が期待できるか、サプリメントの賢い利用法にまで記述がある。また、コラムの内容は、インターロイキンとIL-8、PCR法、急性胃粘膜変、腸上皮化生と分化型癌・未分化型癌、胃壁が胃酸で溶けない理由、プロトンポンプ阻害剤(PPI)、H2ブロッカー、自己免疫性胃炎、バイオブシー・生検・病理検査、抗菌剤と抗生物質、抗菌剤の種類、pHモニター検査、中性脂肪と遊離脂肪酸と飽和脂肪酸である。

その除菌には、胃酸抑制剤(ランソプラゾール又はオメラゾール)と2種類の抗生物質(アモキシシリンとクラリスロマイシン)の組合せの3処方があり、除菌成功率は90%(2005年発表)あったが、年々低下して70~80%程度の成績である。原因は抗生物質クラリスロマイシンに耐性化が進み、ピロリ菌に効きにくくなっているとのことである。

本書はピロリ菌の基礎から検査法や除菌法、さらに食事や食習慣にまでにこの一冊でピロリ菌のすべてをわかる。また、索引が付いており、手元において手軽に利用できるのもありがたい。ピロリ菌の感染は深刻の問題であり、胃癌は身近かな問題である割りには理解度が低いと思われる、是非一読をお薦めする。 (学会事務局)